

青色の春はまだ来ない

登場人物

せがわ はやと

瀬川 隼人

いむら はなこ

井村 華子

ふじさき のぞみ

藤崎 望美

おのでら なおき

小野寺 直樹

もり めぐみ

森 恵

ひろお あやね

広尾 綾音

幕が上がる

隼人「将来の夢は、僕の兄さんみたいなカッコいい警察官になりたいです。それか、弁護士。弱い人の味方になって、みんなが笑顔で暮らせる町を創る手伝いをしたいんだ。だから、もつともつと勉強して、いい大学に行って、兄さんみたいになりたい！…うん、ありがとう！僕、もつともつと頑張るから！」

舞台明転

隼人、下手から来る。時間差で綾音が走って追いつく。

綾音「おっはよう隼人！相変わらず暗いねえ！」

隼人「…なんだお前か。」

綾音「お前とは失礼な！この現役JK、広尾綾音サンが朝からくっらーい幼馴染に声かけてあげてるんだよー？もつと喜んでくれてもいいんじゃないのー？」

隼人「うるさい。しつこい。どうでもいい。」

綾音「出ました隼人の塩対応三段構えー！うん、今日もいつも通りですな。」

隼人「ってか本当にうるさいんだけど…頭に響くからやめろっつ。」

綾音「いやあそれほどでも。」

隼人「褒めてねえから。」

綾音「もう、朝からつんつんしないでよく。ちゃんとカルシウム摂ってる？レタス食べてる？」

隼人「うるせえよ。お前は俺の母さんか。」

綾音「ここだけの話、レタスにはラクチュコピクリンっていう鎮静作用があるからイライラ防止にオススメです♪」

隼人「誰に向かって話してんだよ。」

綾音「それはそうと。」

隼人「切り替えが早い。」

綾音「聞きましたよ隼人サン。先週の進路希望調査書、白紙で出したんですって？」

隼人「…なんでお前が知ってたんだよ。」

綾音「ふっふー。新聞部のエースを舐めることなけれ。いつでもどこでもネタを探して疾風のごとく校内を飛び回っているのだよ！」

隼人「プライバシーゼロじゃねえか。」

綾音「というのは嘘で」

隼人「嘘なのかよ。」

綾音「先生から言われたんだよね。瀬川君に何でもいいから書くように言ってくれって。」

隼人「…そうか。」

綾音「隼人？どうかした？」

隼人「…いや、なんでもない。」

綾音「！やっぱ、今日までの原稿届けに行かなくちゃ！先に行ってるね！」

隼人「こけるなよ。」

綾音「だいじょーぶ！」

綾音、上手にはける

隼人「なんでもいいから、か…。」

綾音「うわああ！」

音響、転ぶ音

隼人「あいつ…盛大にフラグ回収して行きやがった…。」

隼人、席に座り、机の上にあった紙を手取る

隼人「…なんだこれ？『二年四組 瀬川隼人、放課後に文化部委員会の会議があります』…文化部委員会？」

華子、下手から来る

華子「ごつめーん、このクラスに瀬川隼人クンって子いるかな？」

隼人「あ…俺、ですけど。」

華子「あ、その紙読んだ？ごめんねー、活動場所が書かれてなかったみたいなの。放課後に大会議室でやるからよろしくね。」

隼人「あ、あの、俺この委員会に入った覚えはないんですが…。」

華子「え？工藤センセ、直樹、私、のぞみん、瀬川クン…ちゃんと名簿には君の名前が書いてあるよ？」

隼人「…本当だ。でも俺、本当に覚えてない…。」

綾音、下手から来る

綾音「いったあ〜…下級生の前でずっこけた…今日はもうだめだ…。」

隼人「あ、おい、綾音。」

綾音「んー？あれ、井村先輩じゃないですか。隼人に用事ですか？」

隼人「綾音、俺この文化委員会っていうのに入ってることになってるんだけど…。」

綾音「うん。で？」

隼人「で？」

綾音「隼人は文化委員会です。で？」

隼人「いやいや聞いてないんだけどその連絡！」

綾音「あー、伝え忘れてたかも。先週の火曜日、隼人学校休んでたじゃん。そのときに決まったんだよね。」

隼人「お前なあ…！」

綾音「ということなので井村先輩、間違いないです。」

華子「それならよかった。じゃあ瀬川クン、放課後よろしくね。」

華子、下手にはける

隼人「お前、そういうことは早く言えよ！」

綾音「ごめんって。でもどうせ放課後暇でしょ？」

隼人「どうせ、とか言うな！」

綾音「何か用事でもあった？」

隼人「いや…別に…。」

綾音「そうだよねえ。隼人は帰宅部のエースだもんねえ〜。」

隼人「うるさい。」

綾音「ということで放課後、頑張ってるね。」

隼人「面倒くさい…。」

綾音「へ・ん・じ・は？」

隼人「…はい。」

舞台暗転。机の移動が終わった後、音響、チャイム音。

直樹、望美、恵、板付きで舞台明転。

隼人、下手から来る

隼人「…失礼します。」

直樹「ああ、初めまして。君が瀬川君だね？」

隼人「はい。」

直樹「もう少しで井村さんも来るはずだから、適当に座って待ってて。」

隼人「…はい。」

隼人、望美の隣に座る

華子、来る

華子「ごつめーん遅れた！日直ってこと忘れてたよ。もう始まつちやってた？」

直樹「いや、まだだよ。さっきちやうど瀬川君が来たところなんだ。」

華子「よかったあ…つと、直樹、これ。」

華子、直樹に小さな巾着袋を渡す

華子「これ、直樹のだよね？」

直樹「…ありがとう。どこで見つけたの？」

華子「その廊下。ちゃんとしまっておきなさいよ。」

直樹「わかってるよ。」

望美「あ、あの、先輩…。」

直樹「ああ、ごめんごめん。じゃあみんなそろったことだし、始めようか。」

隼人「先生は来ないんですか？」

直樹「先生も何かと忙しいみたいでさ。今日は来られないって。ほら…こんなご時世だしね。」

華子「でも、今日やる内容のリストは貰ってるから安心して。私たちだけでもできるやつばかりだから。」

隼人「そう…ですか。」

直樹「ああ、自己紹介がまだだったね！えっと…誰からやる？」

華子「もう、委員長からに決まってるでしょ！全く、しっかりしなさいよね。先輩はもういないんだから。」

直樹「ごめん。僕の名前は小野寺直樹。二年一組です。この春から委員長をさせてもらってるんだけど…委員長としての仕事はこれが初めてなんだ。大目に見てくれると嬉しいよ。」

華子「同じく三年、井村華子。あ、華子の『はな』は難しいほうの華だから。そこんとこよろしくね。いつもは三年三組にいます。二年のと

きもこの委員会にいました。気軽に華ちゃんって呼んでね♪」

直樹「後輩にはハードル高いと思うよ…。じゃあ次は瀬川君、いいかな？」

隼人「…二年四組、瀬川隼人です。よろしくお願いします。」

直樹「簡潔でいいね。じゃあ最後は…藤崎さん、お願いします。」

望美「は、はい。い、一年一組、ふ、藤崎望美です。よろしくお願いします。」

直樹「うん、ありがとう。前期はこの四人でやっていくから、よろしくね。」

華子「わからないことがあったらなんでも聞いて。一人で溜め込まないこと。わかった？」

隼人・望美「はい。」

直樹「それじゃ、早速本題に入ろう。今回僕たちが取り組む企画んだけど、まずはこれを見てほしいんだ。」

直樹、隼人と望美に紙を渡す

望美「『高校生地域活性化プロジェクト』…？」

華子「そう。どうすればこの街をもっと住みやすくできるかを高校生の視点から考えてみんなの前で発表するっていうイベントなの。」

隼人「みんな？」

直樹「うん。この企画は僕たちの高校だけじゃなくてこの地区にある高校ほぼ全部が参加するみたいなんだ。」

華子「オンラインで開催するから、高校生だけじゃなくて一般の人も見られるみたい。」

隼人「…手抜きはできませんね。」

直樹「もちろんだよ。とはいえ、僕も本格的に取り組むのは初めてなんだけどね。この中で経験があるのは華ちゃんだけだから。」

華子「ちよっと、委員長がそんな調子でどうするのよ。」

直樹「はは、ごめんごめん。」

望美「き、期限は…?」

華子「一ヶ月から二ヶ月つてところかな。毎年そうだったし。」

直樹「短いわけじゃないけど、長いわけでもないんだ。…じゃあちょうど四人いることだし、二・二に分けようか。」

華子「三年が固まるわけにもいかないから…。じゃあ直樹はのぞみんと組んで。私は隼人クンと組むから。」

直樹「いいけど…どうして?まさか瀬川君のことがすく」

華子、直樹の台詞が言い終わる前に直樹に裏拳(顔面で寸止め)

華子「…はっ倒すよ?」

直樹「おお…さすが、番長…。」

直樹、後ずさり

華子「直樹は委員長だし、一年生にいろいろ教えてあげたほうがいいと思って。それに、」

華子、隼人の前に行く

華子「隼人クンには、もう考えがあるような気がするからね。」

隼人「え?」

直樹「じゃあ、そっちは任せるよ。僕と藤崎さんは前の資料を取りに行ってくる。」

華子「ありがと。記録は社会科準備室にあるはずだから先生に開けてもらって。」

直樹「わかった。じゃあ藤崎さん、行こうか。」

直樹、望美、下手にはける

隼人「じゃあ先輩、僕たちも…。」

華子「あーごめん、隼人くん！今すぐにも始めたいのは山々なんだけどさ…。」

綾音、下手から来る

綾音「失礼しまっす！」

隼人「あ、綾音？」

綾音「よっす隼人！頑張ってる？」

隼人「何しに来たんだよ？また先生から伝言か？」

綾音「あー違う違う。用があるのは隼人じゃなくて井村先輩のほうだから。」

隼人「井村先輩？」

華子「そういうことだから、ちょっと待っててくれないかな？何してもいいからさ。」

隼人「まあ…いいですけど…。」

綾音「二十分くらいしたら戻ってくるよ。貴重な時間を無駄にするわけにもいかないしね。」

華子「戻ってきたらすぐ始めるから！」

綾音「じゃっ、井村先輩借りて行きまーす♪」

華子、綾音、下手にはける

隼人「本当に忙しいやつ…。」

隼人、鞆から紙を取り出す

隼人「何して待っててもいい、ね。…やりたいことなんてねーよ。」

隼人、紙をくしゃくしゃに丸め、どこかに投げ飛ばす

隼人「…悪いけど、帰ります。俺、ここにいっても役立たずだと思うんで。」

隼人、鞆をもって下手袖まであるく

恵「ばかやろーっ！」

隼人「…は？」

舞台暗転。下手花道照明オン。

下手花道から綾音、華子来る

綾音「忙しい中ありがとうございます。井村先輩に直接お話を訊けるなんて光荣です！」

華子「いいよ、そんな堅苦しくならなくて。そっちも疲れちゃうでしょ？」

綾音「いえ、井村先輩はわが高校の女子のおしゃれ番長ですから！」

華子「そーゆーこと言わないでよ。」

綾音、華子、舞台まで歩く。舞台明転。

綾音「早速ですが、取材を始めたいと思います。改めまして、新聞部の広尾綾音です。」

華子「三年の井村華子です。」

綾音、華子に座るように促す

華子「今日は、女子の制服が変わったことについて話せばいいんだよね？」

綾音「はい。去年まで女子はブレザーとスカートの組み合わせでしたが、今年からズボンも追加されました。これは井村先輩が主体となつて案を出したのだとか。」

華子「私ってどうか、三年の有志ね。みんなが学校に来たくなるにはどうすればいいか考えただけだよ。」

綾音「井村先輩方のおかげで学校に来るのが楽しみになりました！スカートって冬は寒いし、何より走りにくいんですよ。」

華子「走りにくい？」

綾音「あ、新聞に載せる写真を撮るために校内を走り回ってるので…。」

華子「そういうことね。でも、嬉しいって思ってくれてるなら頑張った甲斐があったな。」

綾音「もちろんです！…ところで先輩、どうして行動を起こそうと思ったんですか？」

華子「んー…特に深い意味は無いんだけど、自分があったらいいなって思うことをやっただけだよ。今は多様性の時代。女子が男の子の格好してても、男子がスカート履いていてもいいんじゃないかなって思ったから。」

綾音「ふむふむ。」

華子「それにさ、高校生って人生の中で三年間しかないんだよ？一番可愛い時期に制服で個性潰されるなんて超もったいないくない？」

綾音「同感です！」

華子「ま、私はあんまり頭よくないからアイデアを出しただけで、中心となってくれたのは生徒会の友達なんだけどね。」

綾音「それでも、井村先輩はみんなの憧れなんですよ。元読者モデル、高校入学した時から校則を守りつつおしゃれするにはどうすればいいかを必死に考え、校門指導の先生を黙らせたという」

華子「ちよっと、それ誰が言ってたの？」

綾音「体育の新島先生です。」

華子「わかった。後で締めておく。」

少しの間

綾音「で、でも本当に凄いですよ！長い間考え続けて、問題も沢山あったはずなのに、こうしてずっと前向きに笑っていられるなんて。」

華子「えへへ…そう、かな？」

綾音「はい。井村先輩は本当に強いです。」

華子「…強くなってるよ。」

綾音「え？」

華子「私は…他の人よりもずっと弱いと思う。」

綾音「そんなこと…。」

華子「あるよ。私は…なりたいたいののために、全部を、諦めてきたんだから。」

綾音「全部を？」

華子、無言で頷く

華子「華子って名前、あんまり好きじゃないんだ。何のひねりもない、すごく平凡な名前。だから…ずっと馬鹿にされてきた。私、小学校のときに空手始めたんだ。いじめられても負けないように。中学校に入ったときから読者モデルを始めた。自分をもっと好きになりたくて。それで、今、番長なんて言われているのもそのせいかな？」

綾音「諦めてるようには見えないんですけど…。」

華子「ううん、私はなりたいたい自分になるために他の全てを…全部、切り捨ててきた。へらへら笑って、みんなにいじられていれば、もっと上

手に世渡りができたのかもしれない。周りの目を気にして過こしていれば、もっと楽に生きられたかもしれない…。わがままで、自己中で、どうしようもない：誰よりも弱いやつだよ。」

少しの間

華子「ごめんね！こんな話しちゃって…。」

綾音「それでも」

華子「え？」

綾音「それでも、先輩は強いと思います。」

華子「私が…？」

綾音「私は、先輩とは真逆の人間です。他の人の顔色を伺って、いつつもへらへらしてて、人の意見に流される…そんな人間です。そして…大切な友達を、守れなかった。」

華子「そんなふうには見えないけど…。」

綾音「中学生のとき、すごく仲がよかった友達がいたんです。周りは小学校からの持ち上がりでしたけど、その子だけ新しく転校してきた子で…私は特に仲のいい友達もいなかったの、その子と一緒に遊んでました。でも…。」

華子「でも？」

綾音「いつからか、その子に対していじめが始まったんです。始めは『何考えてるかわかんないよね』とか『一緒にいたくない』っていう言葉だけだったんですけど…いつからか、根も葉もない噂が広まってきて…。」

華子「…綾音ちゃんも、いじめられるかもしれないって思ったわけね。」

綾音、無言で頷く

綾音「噂はでたらめだってわかってた。あの子はそんなことしない、優しい人なんだって。でも…周りの目が、どうしようもなく怖かった。逆らうなんてできなかった。結局…嘘と周りに流されて、あの子から離れて、いじめを見て見ぬ振りをしてしまいました。一番、守ってあげなくちゃいけなかったのは私だったのに…。」

華子「…。」

綾音「その子は家の都合でまた転校してしまいました。たぶん、もう一生会えないと思います。」

華子「…後悔してるんだね。」

綾音「もう二度と、あんな思いはしたくない。そう思って新聞部に入りました。ここなら、自分の目で、事実だけを見ることが出来るから。…嘘って、事実を捻じ曲げる力があるんですよ。だって、そっちのほうの方が自分たちの都合のいいように出来るから。でも、それは誰かを不幸にする力でもある。私はそんなことに気づけなかった。だから…先輩は、強いと思います。」

華子「綾音ちゃん…。」

綾音「あ、すみません！取材するのは私のほうなのに…。今日はありがとうございました！写真撮ったら終わりです！」

華子「待って。」

綾音「え？」

華子「せっかくだし、綾音ちゃんも一緒に写らない？」

綾音「ええ？！いい、いいですよ井村先輩だけで！それに私撮る側ですし！」

華子「だーめ♪いい話聞かせてもらったし、番長とエースのツーショットなんて注目の間違いなしじゃない？」

綾音「でも…。」

華子「先輩のお願いを断る気？」

綾音「うう、分かりましたよ…腹くります！」

華子「オツケー♪じゃあこっち来て！思いつき可愛くしてあげる♪」

綾音「ええ？！ちよ、ちよっとせんぱーい！」

綾音、華子下手にはける

舞台暗転。少し間を空けた後、上手花道照明オン

上手花道から直樹、望美来る

直樹「社会科準備室に来るのは初めて？」

望美、頷く

直樹「そうだよね。僕も来るのは初めてだし、一年生なんか校舎が違うから、授業で来ることもないからね。」

直樹、望美舞台まで歩く。舞台明転。

直樹「よし、じゃあ探しますか。とはいえ、どこに何があるのやら…。まあ、いろいろ見てみよう。」

直樹、望美、片付けを交えつつファイルを漁る

望美、とあるファイルを開き動きを止める

直樹「どうしたの？」

望美、ゆっくりとファイルに挟んであった一万円札をつまんでみせる

直樹「福沢諭吉…。」

直樹、望美、無言で頷く

望美、すばやく一万円札を元の位置に戻しファイルを閉じて元の場所に戻す

直樹「グッジョブ。」

直樹、望美、またファイルを漁る

直樹「これ…かな？」

直樹、ファイルをぱらぱらとめくる

直樹「やっぱりそうだ。藤崎さん、この棚にあるから見るの手伝ってくれない？」

望美、棚からファイルを取り出し座って読む

直樹「いいアイデアがあったら言ってね。」

望美、無言で頷く

少しの間

直樹「藤崎さんはどうしてこの委員会に入ろうと思ったの？」

望美「活動が、少ないって、聞いていたので。」

直樹「はは、それはそうだね。去年も数えるくらいしか活動なかったし。他の学校の文化部委員会は各部活の委員長で形成されるみたいだけ

ど、ここは委員会にも部活にも分けられない仕事をする、ボランティアの集まりみたいなものだから。」

望美「お払い箱…。」

直樹「あながち間違いでもないかな。」

直樹、ファイルをめくる

直樹「お、これなんかいいんじゃない？ほら、これ。…藤崎さん？」

望美「…っ?!」

直樹「あ…ごめん。驚かせちゃったね。」

望美「あ、いえ、その、あの、わ、私が…。」

直樹「いいよいいよ。今のは僕が悪かった。ごめん。次から気をつける。」

望美「あ、う…はい…。」

直樹、ファイルを棚に戻す。望美、俯く

少しの間

直樹「…僕が怖い？」

望美「い、いえ、そんな…。」

直樹「瀬川君のことも少し避けていたようだったし…僕だけ、ってこともないようだね。」

望美「あの、その…。」

直樹「辛いなら、この仕事は僕一人でやるよ。この量なら一時間くらいで全部見終わるだろうから。華ちゃんには僕から言っておく。だから…。」

望美「ち、違う!です…。」

直樹「違う?」

望美「あ、あの、うまく言えないですけど…違う、です…。先輩は、悪くない…。」

直樹「…自分が、悪いと思ってる?」

望美、無言で頷く

直樹「あまり自分を責めないほうがいいよ。自分が嫌いになるだけだ。…話しづらいなら無理に話さなくてもいい。人に言えないことの一つや二つくらい、誰にだつてあるさ。ま、華ちゃんはほつとかないだろうけどね。」

直樹、ポケットからビニール袋を取り出す

直樹「少し悩みがあるくらいが、よっぽど人間らしい。」

望美「…嘘。」

直樹「嘘なんかじゃないよ。」

望美「みんな、私のこと邪魔だと思ってる。私がないほうが、みんな嬉しいんだって…。」

直樹「そんなこと言っていないよ。」

望美「言ってなくても、思ってる。…心は、見えない。」

直樹「僕は…。」

望美「上辺はいい人。でも中身は？本心は？…その人にしか、わからない。」

直樹、ファイルを閉じる

望美「みんな、嘘つき。大人がいるときは、きれいごとしか言わない。そうすれば、褒められるから。誰もいないときは、平気で、人を馬鹿にする。そうすれば、話のネタができるから。」

直樹「…辛かったんだね。」

望美「心配してた、なんて嘘。本当に心配してたのは自分のしたことが先生にチクられていないかどうか。それだけ。」

直樹「…そっか。」

望美「今のいじめは、体に残らない。傷がついたら、ばれるから。でも、心に残る。言葉で、何度も何度も傷つける。心も、言葉も、目に見えない。その場限り。だから、誰も気づかない。…もう、何も信じられない。信じたくもない。」

直樹「信じられない、か。」

望美「みんな、私のことを嫌ってた。それなのに、『協調性がある』『みんなに慕われている』って、大人はみんな私以外を評価した。…私が間違ってるんだ、って思うようになった。だから…。」

直樹「自分を責めるしかなかった、ってことかな。」

望美、頷く

直樹「…ありがとう。話してくれて。」

望美「え…？」

直樹「言いくいことを話してくれてありがとう。少し嬉しくなった。」

望美「ど、どうして…?」

直樹「…僕、怖がられてるのかなって思ったんだ。いきなり知らない人と組まされて、文句言う暇もなく一緒に仕事しなくちゃならないなんて…。僕、藤崎さんのこと何も知らなかった。でも、これで新しい一面を知れた。それが嬉しいんだ。」

望美「それだけで…?」

直樹「うん。…『俺を信じろ!』とか『自分を信じろ!』なんて、漫画の世界ではよくある台詞だけどさ、実際すごく難しいんだよね。相手のこと何も知らないのに、信じられるわけないだろー! って突っ込みたくなるくらい。だから…僕のこと、信じなくていい。頼らなくてもいい。」

望美「信じなくて…いい?」

直樹「うん。いいよ。藤崎さんが本当に相談したいと思ったときに声をかけてくれればいい。仲良くなる。ペースは人によって違うんだ。きっと藤崎さんは物事を誰よりも慎重に考えるタイプなんだね。うん、僕と華ちゃんには無い長所だ。」

望美「初めて、言われた…。」

直樹「はは、そう?でも、他の人から言われて気づくことって沢山あるよね。」

直樹、またファイルを開く

望美「先輩は、」

直樹「ん?」

望美「先輩は、悩み、あるんですか?」

直樹「…無い、って言ったら嘘になるかな。」

直樹、ビニール袋を望美に見せる

直樹「これ、何だと思う?おっと、怪しい薬じゃないから安心して。」

望美「ろいこ、と…?」

直樹「ロイコトリエン。一種の薬だね。予防薬なんだけど。」

望美「予防…?」

直樹「最近はマスクしてるから気づかれないことが多いけど…まあ、察してくれると嬉しいかな。」

直樹、自分の胸をとんとんと叩く

直樹「…治らなくてね。もうずっとこのままなんだ。それでも、みんなのおかげで毎日が楽しいからいいんだけどね。」

望美、俯く

直樹「どうかした？」

望美「私より、ずっと…。」

直樹「え？」

望美「先輩のほうが辛いのに、私ばかり辛いような言い方して…。」

直樹「それは違うよ。」

望美「でも…。」

直樹「悩みに大きいも小さいもない。順番なんて考えようとするから悩みを溜め込んでしまうんだ。…自分のことを、もっと大切にしてい

い。わかった？」

望美「…はい。」

直樹「よし、じゃあ作業再開…といきたいところだけど、資料を見るのはもうやめにしよう。」

望美「?!ど、どうしてですか…?」

直樹「一通り見てみたけど、毎年どこも同じ様な内容ばかりだ。せっかくだし、僕たちにしかできないプレゼンをしよう。」

望美「で、でも私、引きこもりみたいなどころあったから、この街のことあんまり知らない…。」

直樹「そうか…。」

望美「パソコンなら、使えるけど…。」

直樹「それだ!」

望美「え?」

直樹「資料には商店街とか農家へのインタビューは多かったけど、住民の声は少なかった。パソコンでアンケートをやれば、この街の生の声を聞けるかもしれない!じゃあ、一旦戻ろう!」

望美、頷き、直樹と共に上手にはける

舞台暗転の後、隼人、恵、板付きで舞台明転

恵、忙しなく舞台上(特に隼人の周り)を動き回る

隼人「あの。」

恵「…。」

隼人「あの。」

恵「…。」

隼人「もしもし！」

恵「…。」

隼人「聞こえてねえのかよ…。」

恵「おかけになった電話番号は電波が届かない場所にあるか」

隼人「聞こえてんじゃねーか。」

恵「おっ、いいねーそのツッコミ！何年ぶりだろ？」

隼人「…。」

恵「お？どしたの？さては私の秀逸なボケに感激して言葉も出ないのか？」

隼人「…どうでもいい。」

恵「こんな美少女が目の前にいるのに？」

隼人「自分で言うな。話を通じる奴って分かればもうどうでもいい。」

恵「えくせめて名前だけでも聞いてよ。」

隼人「名前聞いてくださいっていうやつ初めて会ったぞ。」

恵「私の名前は森恵！」

隼人「聞いてねーし。」

恵「この委員会の物理的幽霊部員です。」

隼人「物理的幽霊部員？」

恵「そう。」

隼人「物理的？」

恵「物理的。」

少しの間

隼人「そうか。」

恵「ふっーもつと驚かない？幽霊なんだよ？」

隼人「リアクションなら他を当たってくれ。俺に求めるな。」

恵「ふーん…。ね、何見てるの？」

隼人「漫画。」

恵「好きなの？」

隼人「別に。」

恵「買ったの？」

隼人「友達から借りた。というより、押し付けられた。」

恵「面白い？」

隼人「…別に。」

恵「ふーん…。あ、それよりさっきの紙、あれ何？」

隼人「紙？」

恵「ほーら、キミがぼーいって投げたやつ。」

隼人「…勝手に拾えば。」

恵「私じゃ掴めないの。キミが拾ってよ。」

隼人「何で俺…。」

恵「ほーら、早く早く。」

隼人、嫌な顔をしながら紙を拾う

恵 「進路希望調査？あれ、日付切れてるじゃん。出さなかったの？」

隼人 「出したよ。…返されたんだ。」

恵 「なんでなんで？落書きでもしてた？」

隼人 「…関係ないだろ。」

恵 「そんな怖い顔しないでよ。何も書かないまま出したんでしょ。」

隼人 「知ってるなら聞くなよ。」

恵 「知らなかったよ。でもたまにいるんだ。例えば…私とか？」

隼人 「一緒にするな。」

恵 「でも事実は事実だよ？」

隼人 「…事実は変えられないか。」

隼人、もう一度紙を丸める

恵 「ちよつとちよつと！何してんの？！」

隼人 「もういい。俺は出さない。」

恵 「出さないって…行きたい大学とか、やりたい仕事とか書くだけでいいんだよ？」

隼人 「そんなこと書いたって、何も変わらない。」

恵 「でも…。」

隼人 「いって言うってんだろ！」

恵 「…。」

隼人 「いっつもそうだ。夢を持ってだの努力しろだの…いちいちうるせえんだよ！夢なんか持ったって叶うわけないんだよ！俺に何かを求めるな。俺に期待を押し付けるな！そんなこと書いたって…自分がどんなに無能か思い知るだけだ…。」

少しの間

隼人 「…小さいときは、なんだって言えたさ。なんにでもなれると思ってた。医者、警察官、弁護士、…スーパーヒーローになれるとさえ思

「……でもそんなことなかった。成功する人間は、生まれたときから決まってる。」

恵 「そんなこと……。」

隼人 「人生の勝者は才能を持つてるんだ。学力、権力、財力、芸術、美貌……なんでもいい。才能を持ったごく一部だけが、この世界で夢とやらを叶えることができる。じゃあ、才能を持たない敗者はどうなると思う？……遅かれ早かれ、自分に絶望するのがオチだ。」

恵 「……絶望、ねえ。」

隼人 「俺はそんな敗者の中の一人なんだよ。出来のいい兄さんとは違ってな。……だから俺は、期待するのをやめた。もうどうでもいい。今が楽しければ、それでいい。」

恵 「楽しくなくなったら？」

隼人 「死ぬまでだ。」

間

恵 「……ふーん、そっかあ。そっかそっか、キミの言い分は十分わかった。」

隼人 「は？」

恵 「でもお、死ぬのだけはやめたほうがいいと思うよ？」

隼人 「……は？」

恵 「まずキミが四十階建てマンションから飛び降りるとしよう。普通ならためらうだろうけど、キミなら躊躇せず飛び降りるだろうね。落下速度二百キロメートルでコンクリートの車道に真っ逆さま。首が間逆にへし折れて、ごきつ、ぐしゃつと……。」

隼人 「も、もういい。わかったから……。」

恵 「いいの？」

隼人 「十分伝わった。妙なリアリティーあったしな……。」

恵 「うん。とりあえず、自殺願望だけはやめとけー？」

隼人 「だけは、って……ほかはいいのか？」

恵 「それを私に聞いてどーすんのー。キミの人生なんだから私が言う必要ないでしょー？」

隼人 「それは、そうだけど……。」

恵 「ま、自分の心の赴くままに生きてみるのもいいんじゃない？少なくとも、キミの人生をどうこう言う権利は誰にもないんだからさ。」

隼人 「やりたいことなんてない。したいことなんて、なおさらわかんねーよ。」

恵 「そんなの生きていけば見つかるよ。ほら、『命あつてのものだね〜』って言うでしょ？」

隼人 『命あつての物種』、な。なんでそんなにほのぼのとしてるんだよ。」

恵 「ま、細かいことはいいじゃない。…でも、ほんとはあるんでしょ？やりたいこと。」

隼人 「…くだらない夢物語だよ。」

恵 「くだらないかどうかは私の独断と偏見で決める！…嫌じゃなかったら、聞かせてほしいな。」

隼人、ため息

隼人 「…警察官になりたかったんだ。街の平和と安全を守る仕事をする兄さんが…すごくかっこよかった。俺もあんなふうになりたい。この

街を、もっともっと暮らしやすくする手伝いをしたい。…そう思うようになった。」

恵 「なにそれ、超かっこいいじゃん！」

隼人 「…でも、俺には兄さんみたいな才能はなかった。運動が出来るわけでもない、勉強もそこそこ。特技もなければ、長所もない。俺が警

察官になんて、なれるはずなかったんだ。でも…。」

恵 「でも？」

少しの間

隼人 「俺にも、出来ることがあるのかな。」

恵 「ふっふー、よいお話を聞かせてもらいました。そんなキミにひとつだけお告げを授けてあげましょう。」

隼人 「なんだよ。」

恵 「…最後に、誰かにありがとうって言える人生だったらいいね。」

隼人 「ありが…どう？」

恵、無言で頷く

恵 「生きててよかったとか、人生に一片の悔いなし！とか、そんなご立派なものじゃなくていいからさ。ただ一言だけ、ありがとうって言えたらいいと思う。感謝の気持ちを伝えられるってことは、それだけ周りの人といい繋がりを持てたってことだから。」

隼人「…繋がり、か。」

恵「キミの近くにも、キミと繋がりを持ちたいっていう人もきつといるはずだよ。キミが気づいてないだけ。」

隼人「…凄いな。」

恵「え、そう？」

隼人「…なあ、なんで俺にそんな言葉かけてくれるんだ？」

恵「ん〜。わっかんない。でも…。」

少しの間

恵「見てられなかったんだ。前の私を見てみたいで…。」

隼人「前の…？」

恵「あ、そろそろ行かなくちゃ。じゃね〜♪」

恵、下手にはける

隼人「最後まで自由なやつだったな…。」

隼人、丸めていた紙をのばす

隼人「俺は…兄さんみたいにはなれない…でも…。」

綾音、下手から来る

綾音「あれ、隼人だけ？華ちゃん先輩戻ってない？」

隼人「いや、見てないけど…。」

綾音「そっか、わかった。じゃね！」

隼人「なあ、綾音。」

綾音「ん〜？」

隼人「この紙…職員室に行ったらもらえるかな？」

綾音「…！書く気になったの?!」

隼人「まあ…書くのはタダだしな…。」

綾音「私、貰ってくる！十枚？二十枚？」

隼人「一枚でいい！っていうか俺が貰うからお前はここにいろ！」

綾音「いいよいいよ！隼人はこれから仕事なんだから。私が行く！」

華子、来る

華子「待たせてごめん！」

綾音「あ、華ちゃん先輩！じゃあ写真撮っちゃいましょう！」

華子「オッケー、いつでもいいよ！」

直樹、望美、下手から来る

直樹「戻ったよー。」

望美「一応、パソコンも、持って来ました。」

華子「ありがとー！」

綾音「あ、小野寺先輩じゃないですか！委員会全員集合ってわけですね。せっかくですし、みんなで写真撮りましょう！」

直樹「僕たちも？」

綾音「もちろんです。次はいつ集まれるかわからないんですから、今のうちに撮っておかないと！」

直樹「それもそうだね。」

綾音「じゃあここによってください！いきますよー…はい、チーズ！…オッケーです！」

華子「あれ、直樹、資料持ってこなかったの？」

直樹「ああ、それなんだけどき、今回は資料なしでやってみないか？」

隼人「僕たちだけで、一から考えるってことですか？」

直樹「そういうこと。」

華子「でも、オンラインなんて初めてだし、一からなんて難しそう…。」

望美「大丈夫。私のパソコンならネットにも繋がられるし、サイトも立ち上げられるから、むしろ、楽になる、と思う…。」

隼人「面白そうだな。」

望美「が、頑張り、ます。」

華子「はいはい！じゃあ私からも提案。…綾音ちゃんもこの仲間に入りたいんだけど、どうかな？」

綾音・隼人「ええええええ？！」

望美「新聞部と、手を組むってことですか？」

華子「うん。私たちだけじゃ限界があるし…餅は餅屋って言うでしょ？」

直樹「いいんじゃないか？」

隼人「軽っ！」

直樹「いろんな意見も聞きたいしな。」

望美「私も、賛成、です。」

華子「ということで、お願いしてもいいかな？」

綾音「…でも…。」

隼人「…まあ、いいんじゃないか？」

綾音「！わかりました！頑張らせていただきます！」

直樹「じゃあ、改めてよろしくお願いします。積極的に意見を出してくれると嬉しいな。」

直樹以外「はい！」

わいわいしながら幕が下りる